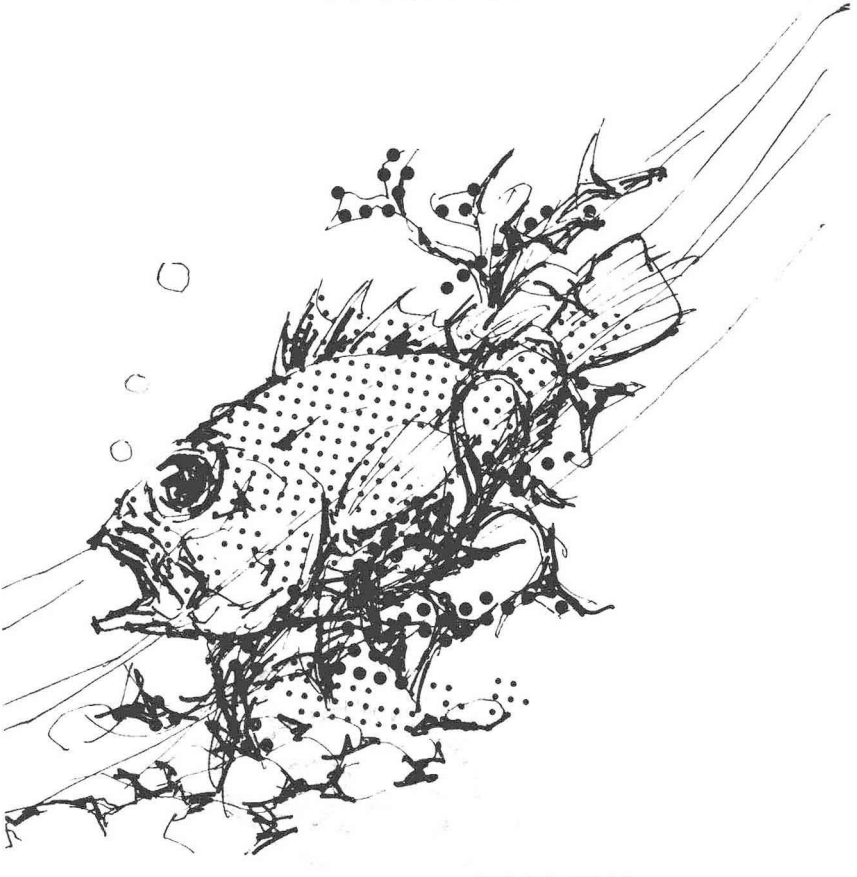
流人人別帳

妻屋大助



和同出版社

流人人別帳　定価二八〇円

昭和三十四年三月二十日発行

著者　妻屋大助
発行者　礒部節治
活版印刷　新興社印刷所
平版印刷　伸光印刷株式会社
製本所　岡島製本所

発行所　東京都文京区西江戸川町一二　株式会社和同出版社
電話(92)八六一二
振替東京七一五二六

流人人別帳

目次

鬼 —第一話— 五
恋女房 —第二話— 三七
まごころ —第三話— 五三
黒髪 —第四話— 七〇
女流人 —第五話— 一四五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

浮　気　—第六話—　一八三
加賀船　—第七話—　二二三
樽船の女　—第八話—　二四七

装本　富田千秋

浮　気　—第六話—　一八三
加賀船　—第七話—　二一三
樽船の女　—第八話—　二四七

装本　富田千秋

鬼

—第一話—

一

きようも島は西北風がひどかつた。

山を揺がすような唸りのあいだに、波はそれにも負けないくらいの轟音をひびかせて、島の周囲に滝のような飛沫をたてていた。

江戸から南へ海上六十六里、三宅島から四里八町、黒潮の逆巻くなかに、周囲わずかに四里たらず、屹然と突起する御蔵島は、夏もなかばを越すと、明年四月の声をきくまでは、毎日こうした自然の猛威のなかに息を殺していなければならなかつた。

西北風をまともにうける北海岸のけわしい絶壁から、四、五丁登つた島山のひだに、島民の住

家があつた。風をよけて低地をえらび、木皮(きはだ)ぶきの屋根に石をならべて警戒し、点々と、木のまがくれに十四、五軒、ここが島でただ一カ処の人里である。島民の数は百人そこそこだつた。

もともと伊豆七島は流人の島である。この島にも流人がいた。流人は島民とは別に、里外れに流人小屋を作つて住んでいる。これこそ文字通り雨露をしのぐにたるだけの掘立小屋で、人間の住むたてものとは思えないものだつた。

「たのむ、お静、島民の子でさえ育てていけないこの島だ。流人の子が育てられるわけはない。一日のばせばそれだけかわいさがましてくる。お返し申してくれ、この通りだ」

島年寄総左衛門の息子島太郎は、まるで拝まんばかりだつた。しかしお静ははだけた胸に、生れたばかりの嬰児を抱きしめ、女豹のように目光らせていた。

床もない流人小屋は、風の通るごとに、頭の上に泥がおち、木の葉が降つてきた。

「嫌です、だれがなんといつても、この子はあたしが育てます。殺すなんて、殺すなんて」

「これほど云つても分らんのか、お前がどんなに育てるといつても、だいいち島の掟が許さない、そのうちおらの名前だつてでてくる」

「だれがあんたの子だと云うものか、生れた子を殺せと云うような父親を……」

「じゃ、云つておく、おらなんにもしらねえぞ、子でもなければ親でもねえ、その子のためお前がどんな目にあおうと、おらしらねえ」

「分つています。帰つて下さいつ！」

母親の声に驚いて乳児が火のつくように泣きだした。

お静がこの島に流されてきたのは三年前の正徳四年で、絵島生島の大奥事件の御殿奥医師奥山交竹院と一しよだつた。流人に似合わしからぬ気品高い美貌に、島民たちはてつきり絵島とおなじ御殿女中だろうと噂したが、たれも素性はもちろん罪科さえほんとうにしる者はなかつた。ただ島年寄の総左衛門だけが、護送の役人から、

「附文（流人と一しよに処刑地の島役に下附する罪状を認めた送状）は三宅島島役に渡しておいたが、この流人は大奥事件の一味ではない、わけある流人じや、とくべつ、いたわつてつかわせ」

といわれ、そのわけはわからぬながらも、自分の家に引取つて下女代りに使つた。

これは、総左衛門としては、流人にたいしての最大の恩恵である。

元来、この島は三宅島の属島で、一粒の米麦もとれない。食糧は全部三宅島から配給された。

しかし三宅島はこの島の独立を警戒して、御蔵百人になれば油断するなと云い、五十人分以上の食糧は絶対に送らなかつた。だのに島民はすでに百人近くなつている。勢い食糧の欠乏は甚だしかつた。そのため、次男以下の妻帯を禁じ、生れる子供も二人まで、あとは〃お返し申す〃と称して圧殺した。

こうした状態のところに、家に引取つて食わせるということは並々ならぬ恩恵だつた。

彼女もその厚意をしつて懸命に働いた。よそ目にも堪え得られるかと案ぜられる手足で、潮を汲み粟をついた。その涙ぐましい努力に総左衛門一家も感心し家族同様に遇した。

そのお静が父親のしれぬ子をはらんだのである。しれぬではない、口を緘して云わなかつた。が、総左衛門や島民たちには想像がついた。被疑者は次男の島太郎、彼女が流人でなかつたら、島の掟がなかつたら、嫁にしてもと考えている総左衛門だつたが、現実は許さなかつた。

どうせたれの子であつても〃お返し申す〃子である、強いて白状させれば籔蛇とならんもしれぬ、彼女が頑なに父親を云わぬことを、内心感謝しながら、それでも世間のてまえ、部落外れに小屋を作つてそこに彼女を移した。

彼女は男児を分娩した。総左衛門は処置を迫つた。ところが承知しているはずの彼女が、にわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

かにそれを拒みはじめた。産んではじめて母の切ない愛情をしつたのだ。

総左衛門が必死に説得したことは云うまでもない。が、彼女は人間が変つたように頑強に応じなかつた。島太郎も幾度も足を運んだ。結果は父の場合より悪かつた。

「かわいそうだが、今日から食糧をとめるより他ない、そしたら考え直すだろう」

総左衛門は暗然として云つた。

それが最後の手段だつた。

二

風のうなりと波のとどろきに神経をかきむしられるような日が毎日つづいた。そのくせお天気は来る日も来る日も薄気味悪いほど晴れわたつていた。

遠く沖の彼方には富士山がかすんでみえたし、大島の三原山には立ちのぼる御神火の煙まで望まれた。三宅島は呼べば応えるほどの近さに迫つて、海岸に砕ける白い波さえ目に映じた。

しかし島は相変らず孤独だつた。

入つてくる船は全然なかつたし、出て行く船は島に持つていなかつた。漁期を終つた周りの海

には漁船も影も見せなかつた。船のない海を眺める侘しさは島に住む者にはひとしお痛切だつた。

お静が食糧をとめられてから十日たつた。結果はここに書くまでもない。まんまるく肥えていた乳児が、手の間からすりおちるようにやせはて、そのくせ乳首にすいつく唇だけが嚙みつくように痛かつた。

――この児は死ぬ――

彼女は愛児にいどみかかる死の影を目の前に凝視していた。

が、死の影にいどまれているのは、愛児だけではなかつた。彼女自身も同様だつた。食糧を止められて以来、なに一つ口にしていない。餓死はもう目前に迫つている。しかし彼女はじぶんが死ぬことはさほど苦痛とは思わなかつた。ただ愛児の餓死を目の前にみるのが堪え難かつた。

だけど、こうなることは、考えるまでもなく、はじめから分りきつたことだつた。

お返ししなければならぬ子を、お返ししなかつたからである。

――どうしてこの島では、生れた者を殺さねばならないのだろう――

理由ははつきりしている、食糧がないためだ。が、彼女にはこの理由だけでは割り切れぬもの

があつた。もすこし考えたら他にまだよい方法がありそうな気がした。島の人たちはその考えることを怠つている。そのうち子供を殺すだけではおさまらなくなり、大人同士が殺し合うようになるにちがいない。この世に生地獄というものがあるなら、それこそほんとうの生地獄であろうと彼女は考えた。

しかし、どれほどそんなことを考えても、迫つてくる餓死の影は遠ざからなかつた。追いつめられた彼女は、どうせ死ぬなら母子一しよに死のうという気になつた。

——坊や、許しておくれ、せつかく生れてきたのに、育てることのできないお母さんを……。そのかわりお母さんはいつまでもお前と一しよにいます——

いくどもその耳もとで繰返しながら、ボロにくるんだ乳児を抱きしめて小屋を出た。

覚悟をきめると不思議に涙も出ない。

外は相かわらず夜風がうなつていた。時刻も分らない。が、沖にのぼつた片割月はもう傾きかげんだつた。

彼女は部落とは反対に島山への坂道をのぼつて行つた。四半里もあるいた処に、高い崖下に深く海の入りこんだ淵がある。チゴガ淵とよんで、流人たちが野合の結晶を投げこんできた淵であ

る。やがて嬰児を抱いた彼女の影は、その崖の上に立つていた。

幾多の幼ない体をのんだ淵は、眼下に鳴りをひそめて、新しい犠えを待つている、それを崖の上から見守るように、石の地蔵尊が一基、青い月の光に濡れて立つていた。いつの頃か島にきて発心した流人が、浮かぶ瀬もない非運の魂の追善のため自分で刻んで建立したという。その慈愛の笑をたたえた温顔をみたとき、お静は今まで忘れていた悲しみが、ふいに湧き上つてきて、はげしく嗚咽しはじめた。

「お地蔵様、お許し下さい。死ぬより他に道はないのでございます。お見逃し下さい」

地蔵尊は頷いて下さつたような気がした。

彼女は立ち上つて崖際へ歩いていつた。吹き上げる風が髪をみだし、岩を這う長い影が、ひとしお人間の哀れさをそそつた。

乳児は懐ですやすやと眠つていた。不思議にみち足りた眠りかたである。彼女はその顔をしげしげと見入り、新しい涙が頬を伝わりはじめた。

わずか十日にすぎぬ生涯。

だけど、長く生きることが、必ずしも、人間の倖せではありません——。

彼女はそう囁きかけて、ふつと自分の過ぎにし二十三年の生涯が、矢のように脳裏をかすめた。

彼女は武州八王子の由緒ある郷士の家に生れた。事情あつて江戸のある旗本の養女になり、上役の屋敷へ行儀見習にあがつているうち、同僚のすすめで切支丹の信者となり、それが発覚して捕えられ、同僚は他の信者と共に獄門にのぼり、彼女は遠島になつた。島に来て三年、総左衛門一家のさしのばしてくれた愛の手に、一途にすがつて、今日まで生きてきたが、その一生は決して倖せなものとは云えなかつた。しかし今となつては一切が夢である。

大きな雲が月を覆うた。お静は暗い淵をじつと見下した。

海鳥が無気味な啼声をたてて島を離れて行く。

不意に嬰児が火のつくように泣き出した。

彼女はその泣声にかり立てられたように、坊や、許して！　と身を躍らせようとしたとき、背後から大きな力でぐいと引きもどされ、あつと云うまに懐の乳児を奪いとられた。

「だ、だれです」

おそろしく大きな男が泣き叫ぶ乳児を抱いて、彼女を睨みすえていた。

月が雲をぬけた。

「あつ、交竹院さん、死なせて下さい、止めないで下さい」

「だれが止めるものか、死にたければ勝手に死ね、子供はおれがもらつておくわい」

云い捨て、くるりと月に背をむけると、さつさと歩きだす。お静はうろたえた。

「ま、まつて下さい」

だが、交竹院はふり返りもしなかつた。

三

障子をあけた明るい部屋で、お静は薬研に余念がなかつた。

無造作に束ねた髪、木綿の筒袖、だが、ほつそりした面には生気がよみがえり、その物しずかなたたずまいには、育ちをしのぶ上品さが感じられる。

あれから半月、季節のあゆみは早く、すでに、海の色にも、風の音にも、秋の気配はひとしお濃かつた。

彼女は手をとめて、そつと、かたわらの乳児に目をやつた。よく眠つている。つきたての餅の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook